

②土地利用現況

- 平成 30 年度都市計画基礎調査によると、都市的土地利用は 1,065ha(南草津エリア全体の 68.6%)となっている。
- 住宅用地 337ha(同 21.7%)、JR 南草津駅周辺や幹線道路沿いの商業用地 92ha(同 5.9%)、大規模な雇用の場となっている工業用地 90ha(同 5.8%)は市全体より割合が高い。

表 参考-4 平成 30(2018)年土地利用割合

	面積	割合
田	171ha	11.0%
畑	34ha	2.2%
山林	75ha	4.8%
水面	91ha	5.9%
その他自然地	115ha	7.4%
住宅用地	337ha	21.7%
商業用地	92ha	5.9%
工業用地	90ha	5.8%
農林漁業施設用地	3ha	0.2%
公益施設用地	161ha	10.4%
道路用地	242ha	15.6%
交通施設用地	18ha	1.2%
公共空地	43ha	2.8%
その他空地	79ha	5.1%
南草津エリア計	1,551ha	100.0%

※都市計画基礎調査 平成 30(2018)年

都市的土地利用

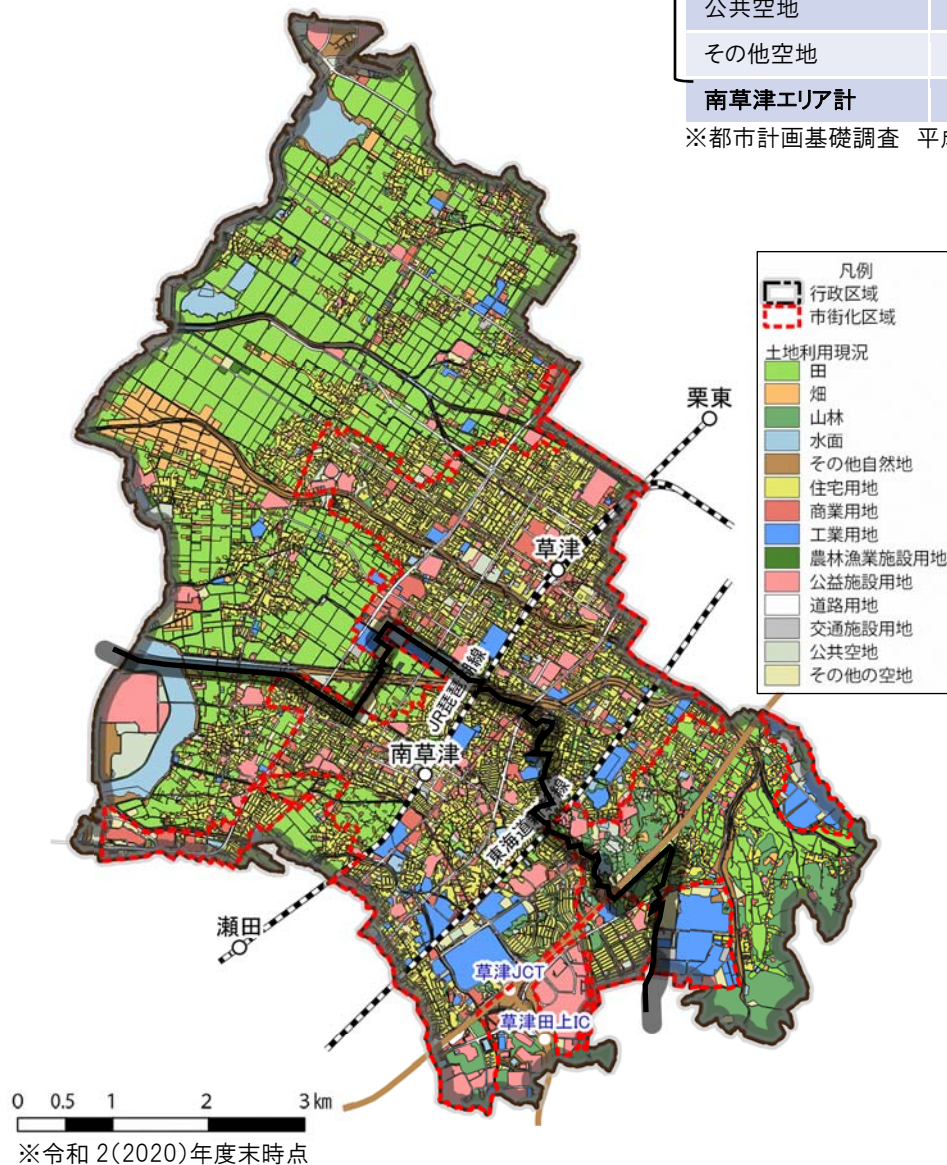


図 参考-5 土地利用現況図

3. 都市施設等

①道路

- 南草津エリアにおいては名神・新名神高速道路が東部を通り、草津 JCT および草津田上 IC がある。
- 南北軸として国道 1 号および京滋バイパス、都市計画道路山手幹線、都市計画道路大津湖南幹線などがある。
- 国道 1 号、県道平野草津線、県道大津草津線などの混雑度が高い(混雑度 1.25 以上)。
- 南草津エリアにおける未整備の都市計画道路として、都市計画道路山手幹線、都市計画道路平野南笠線、都市計画道路大江霊仙寺線がある。

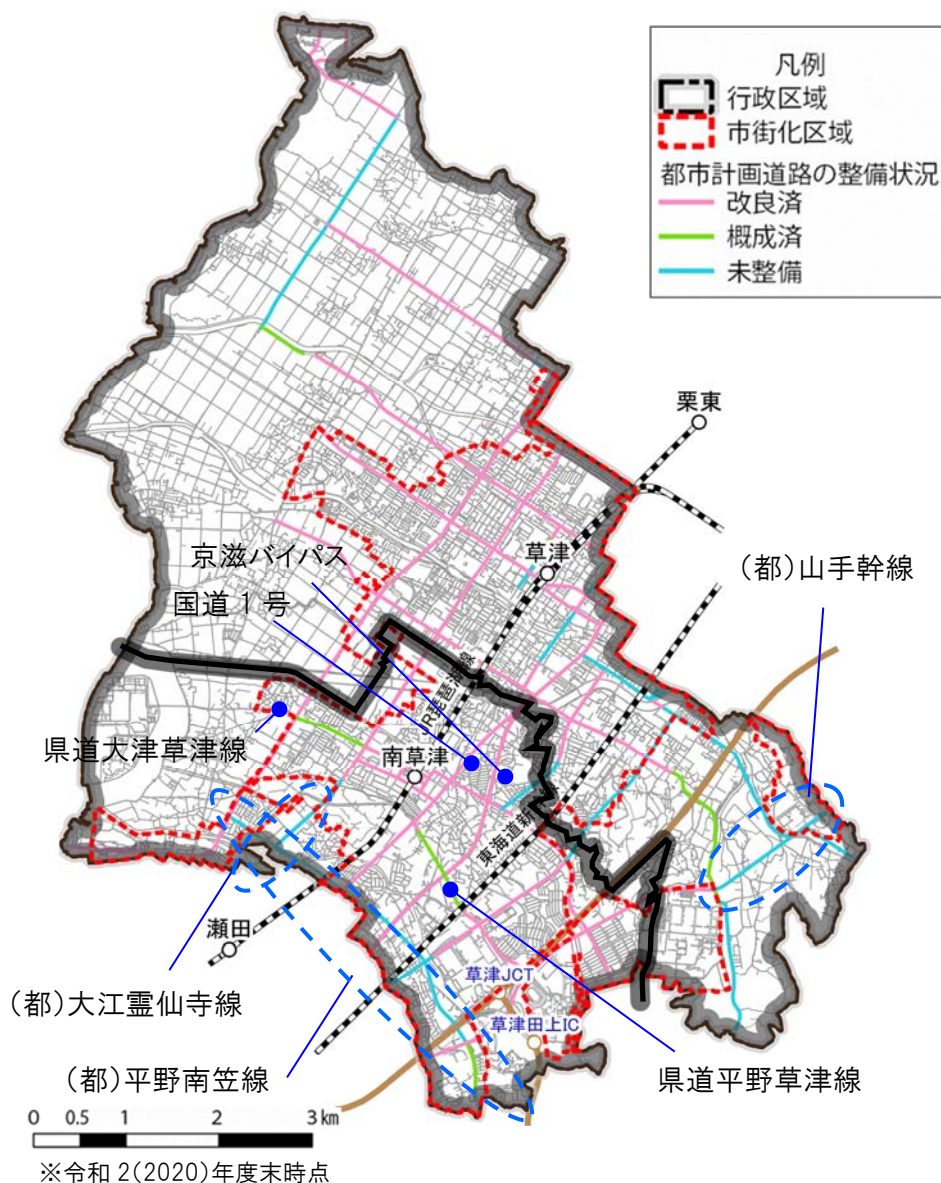


図 参考-6 都市計画道路の整備状況図

②交通環境

- JR 南草津駅の乗降客数は県内一位の 61,510 人(平成 30(2018)年)となっている。
- 南草津エリアでは、路線バスとして近江鉄道バスおよび帝産湖南交通、コミュニティバスとしてまめバスが運行している。
- 草津市の主な交通機関は自動車・二輪車であり、公共交通(鉄道・バス)の分担率は 16%程度となっている。

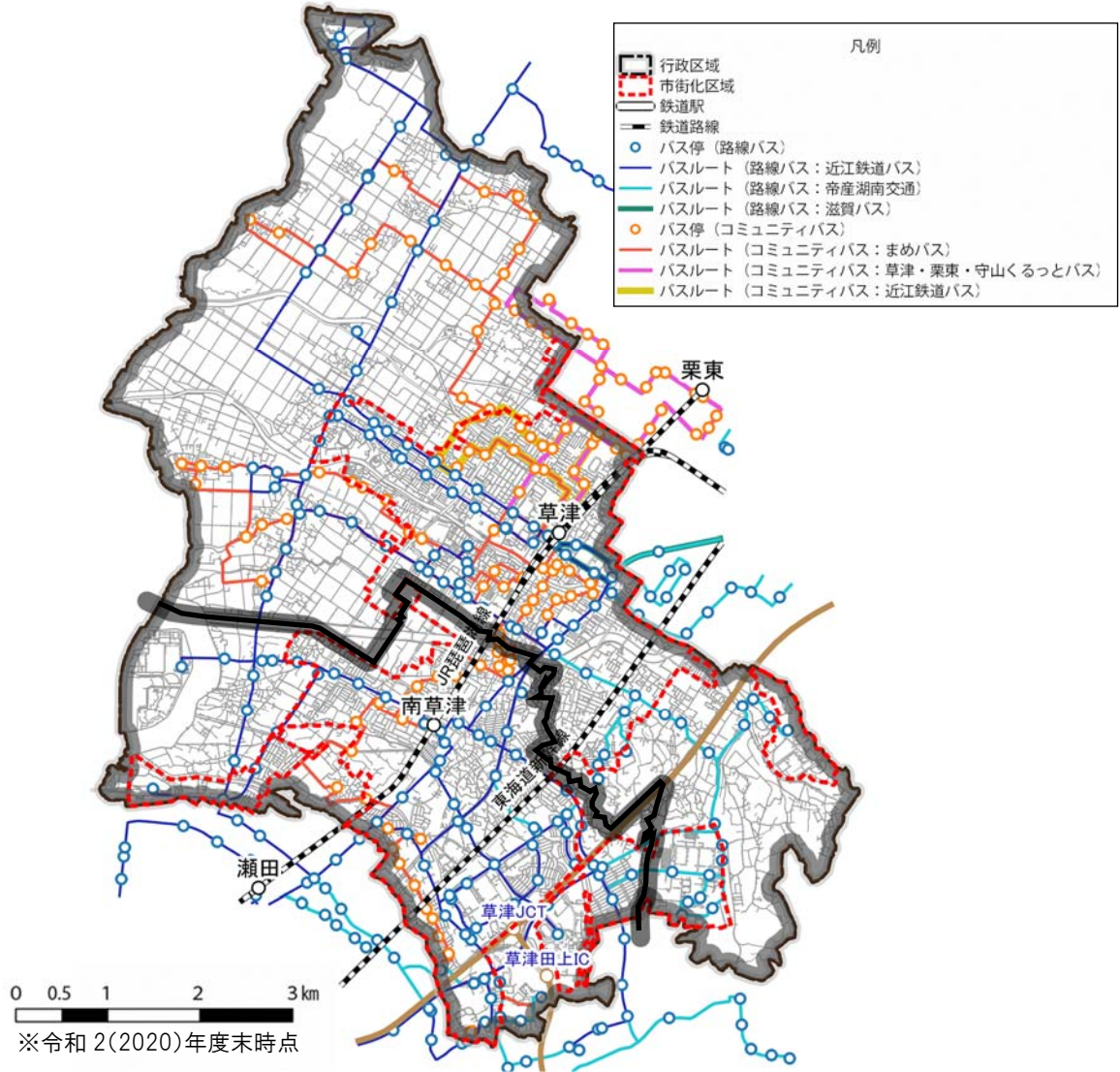
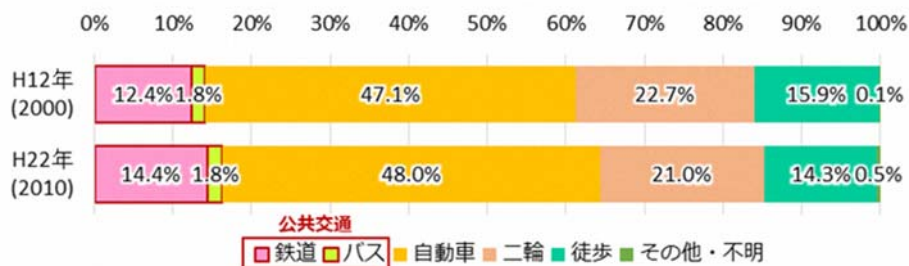


図 参考-7 公共交通網図



※近畿圏パーソントリップ調査 平成 22(2010)年

図 参考-8 公共交通機関分担率(草津市全体)

③公園・緑地

○ 南草津エリアにおける未整備の都市計画公園として、野路公園、野上公園がある。

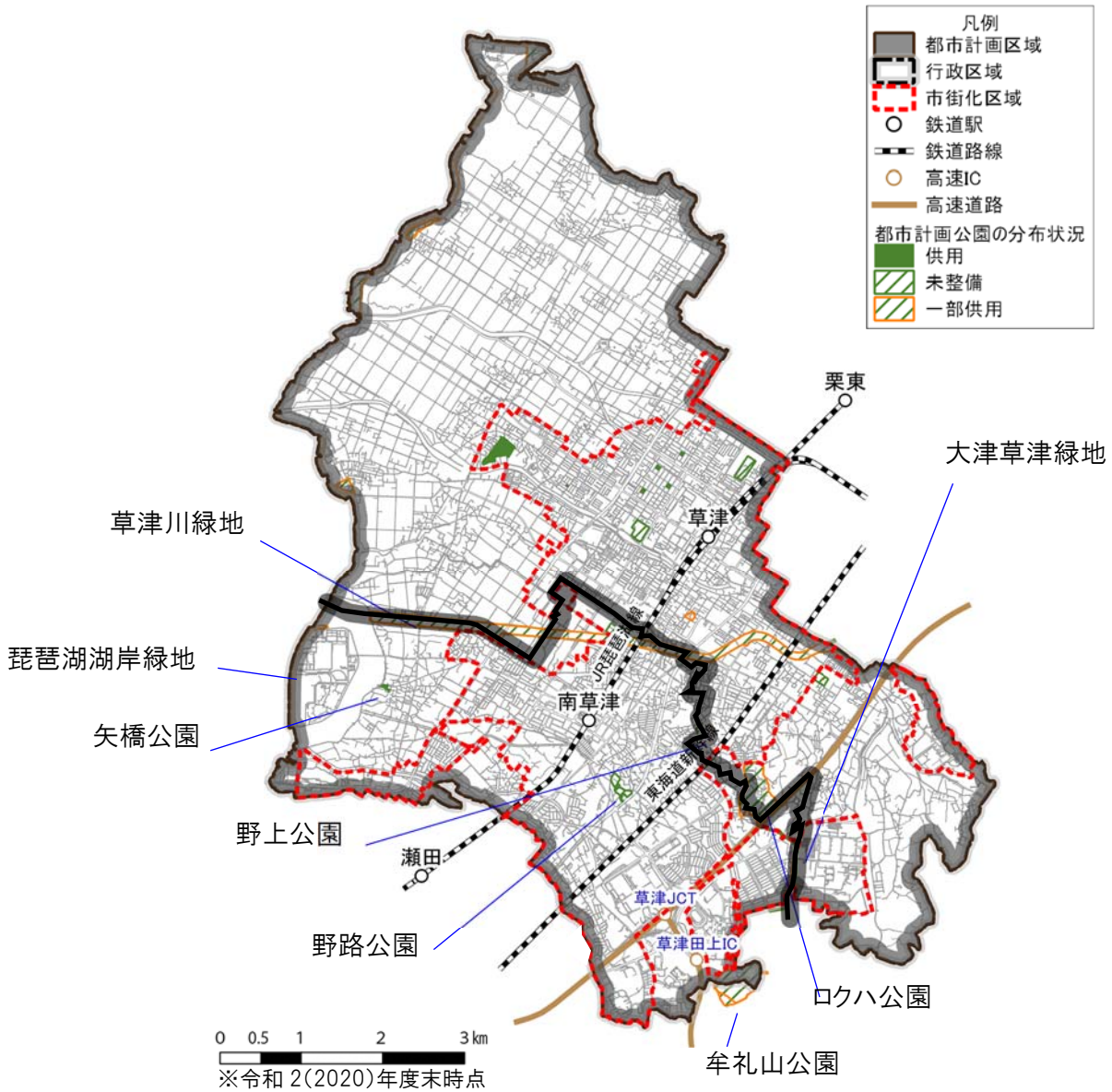


図 参考-9 都市公園の分布図

④公共公益施設

- 各学区に地域まちづくりセンターが立地している。
- びわこ文化公園都市エリアを有し立命館大学などが立地している。
- フェリエ南草津内の市民交流プラザ、アーバンデザインセンター・びわこ・くさつ(UDCBK)、草津クリアホール、南草津図書館などの公共公益施設が JR 南草津駅前周辺に集積している。

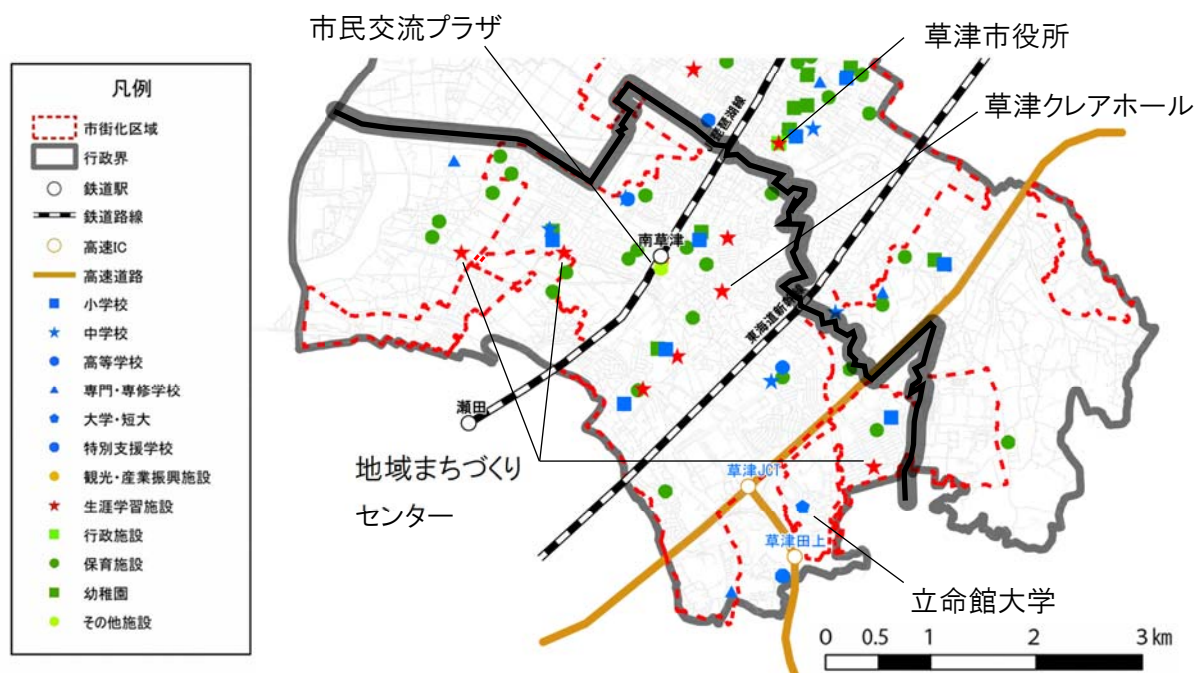


図 参考-10 公共公益施設の分布図

⑤その他施設

- 医療施設としては、草津総合病院、(医)芙蓉会南草津病院、びわこ学園医療福祉センター草津、県立精神医療センター、南草津野村病院、近江草津徳洲会病院などが立地し、徒歩圏人口カバー率は 92.7%となっている。
- 大規模商業施設としては、フェリエ南草津のほか、西友南草津店、マツヤスーパー矢倉店、フレンドマート追分店・南草津店、イオンモール草津、スター草津グリーンヒル店などが立地し、徒歩圏人口カバー率は 66.9%となっている。

参考 4 上位関連計画

1) 上位計画

① 第 6 次草津市総合計画(令和 3(2021)年 3 月策定)

- JR 南草津駅周辺を「にぎわい拠点」、草津 JCT および草津田上 IC 周辺を「学術・広域連携拠点」に位置付け
- 令和 14(2032)年度が目標年度



図 参考-11 将来のまちの構造

②草津市都市計画マスタープラン(令和3(2021)年度策定予定)

- JR南草津駅周辺を「南部中心核」、草津JCTおよび草津田上IC周辺を「複合連携核」、老上西に「地域再生核」を位置付け予定
- 令和22(2040)年が目標年次



軸

市内外や市内の核の間を道路や公共交通の軸で効果的に結ぶことにより、賑わいや利便性の向上を図るとともに、景観・環境形成や防災性向上に寄与する水とみどりの軸の形成を目指します。

核

市内の拠点として核を設け、互いに地域の特長を生かした役割を担い、相互に補完し合いながら、市内でメリハリある土地利用に向けた拠点性の向上や地域再生の核の形成を目指します。

ゾーンおよび土地利用転換区域での土地利用を基に、施設の立地誘導や環境整備等を行うことにより総合的に拠点性を高め、人が集い、活動し、交流できる空間の形成を目指します。

土地利用転換区域

本市が持つ土地利用の可能性を最大限に発揮できるように区域を設けて、区域毎の特性に応じた計画的な土地利用を検討し、契機を捉えた都市づくりを推進します。

ゾーンの中でも、特に重点的な検討と取組の推進が必要と考えている箇所を示しています。

ゾーン

本市の都市づくりの基本となる土地利用の誘導・規制を促進するにあたりゾーンを設定します。

都市計画制度の運用において基礎となる区域区分(市街化区域・市街化調整区域)および用途地域の指定を通じて土地利用を実現することを基本とします。

図 参考-12 将来都市構造図(案)

2) 関連計画

① 草津市立地適正化計画(平成 30(2018)年 10 月)

- JR 南草津駅周辺を都市機能誘導区域(誘導施設:子育て支援施設、図書館、スポーツ施設、大規模商業施設、地域交流センター)、工業系用途および西側商業エリア以外を居住誘導区域に設定
- 令和 21(2039)年度が目標年度



図 参考-13 誘導する都市機能(拠点別)

②草津市地域公共交通網形成計画(平成30(2018)年10月)

- 都市機能誘導区域と生活・交通拠点、広域交通連携エリアといった拠点間を結ぶ基幹軸としての公共道路線と支線交通・補完交通を設定
- 令和9(2027)年度が目標年度

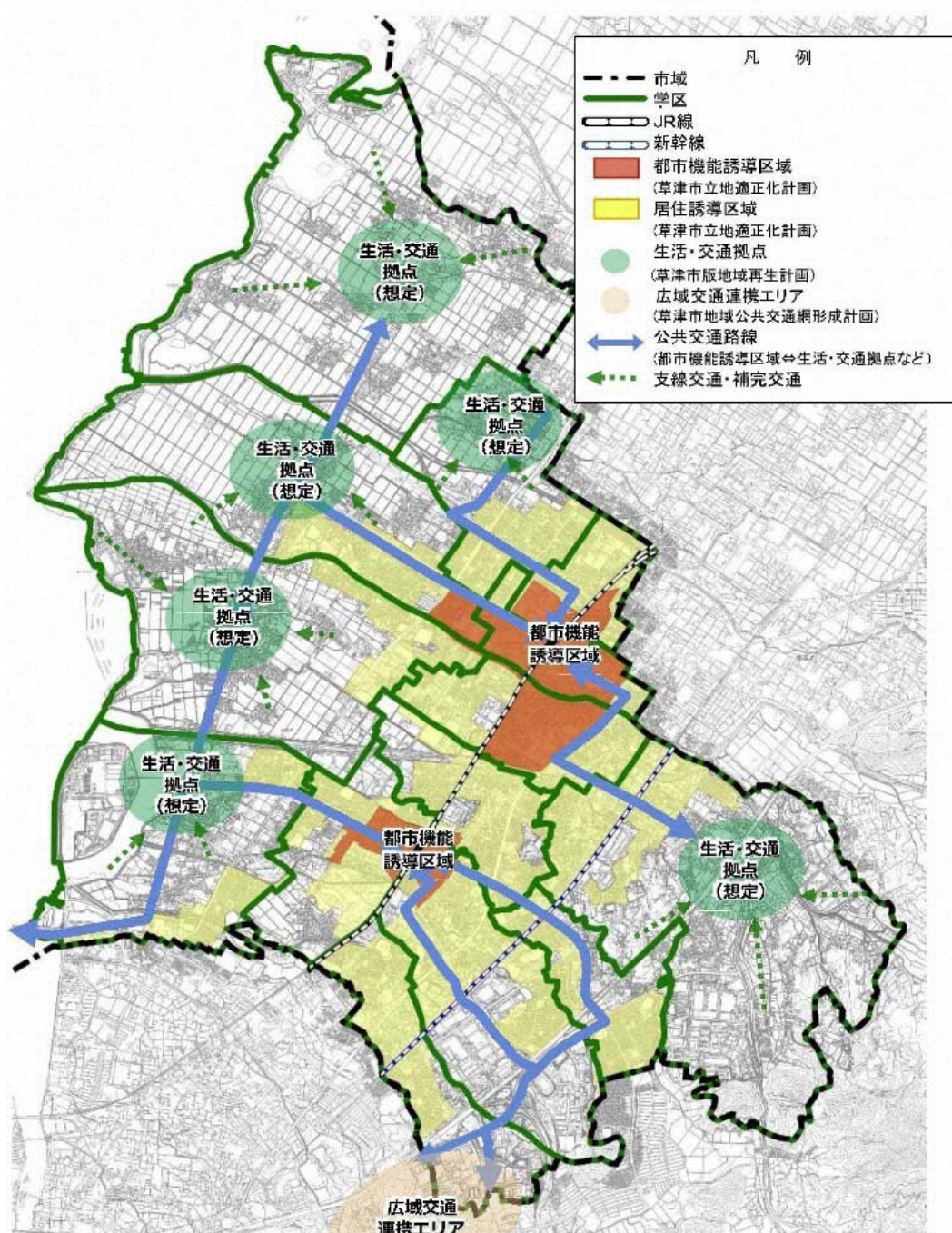


図 参考-14 計画の連携イメージ

③草津市版地域再生計画(平成 30(2018)年 10 月)

- 生活拠点の形成、交通環境の充実、地域資源を活かした産業の支援を基本方針に設定
- 令和 21(2039)年度が目標年度

施策の柱 1 生活拠点の形成
施策の柱 2 交通環境の充実
施策の柱 3 地域資源を活かした産業の支援

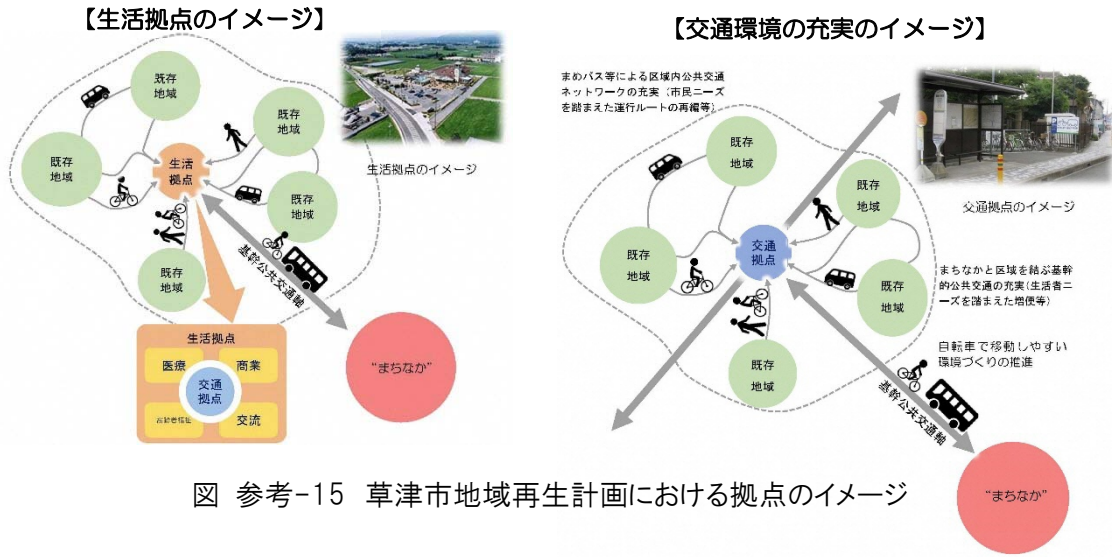


図 参考-15 草津市地域再生計画における拠点のイメージ

④草津市健幸都市基本計画(平成 28(2016)年 8 月)

- 都市計画や公共インフラ整備等における健康に対するアプローチ、個人や地域の主体的な健康づくりの支援等の強化、健康産業の振興や大学・企業等との連携・協働した取組
- 令和 4(2022)年度が目標年度

目指せ、健幸都市くさつ！！ ～住む人も、訪れる人も、健幸になれるまちを目指して～		
まちの 健幸づくり	1 出かけたくなるまちづくり	(1)歩いて暮らせるまちづくり (2)安全・安心に配慮した公共空間の整備 (3)賑わい・うるおいの向上に向けたまちの環境づくり
	2 交流機会や健康拠点の充実	(1)交流機会の充実 (2)健康拠点としての草津川跡地公園や各地域の公園の活用
ひとの 健幸づくり	1 地域の主体的な健康づくりの推進	(1)地域の特性に応じた健康づくり (2)支え合いのコミュニティづくり
	2 個人の健康づくりの推進	(1)全世代に共通した健康づくり (2)ライフステージに応じた健康づくり
しごとの 健幸づくり	1 地域産業と連携した健康産業の活性化	(1)ヘルスツーリズムを含むヘルスケアビジネスの育成支援 (2)特産物を活かした健康な食等の推進
	2 大学・企業等との連携	(1)産学公民連携とその仕組みづくり (2)健康に関する情報提供

図 参考-16 計画の体系

⑤びわこ文化公園都市将来ビジョン(平成 24(2012)年 8 月・滋賀県)

- 「土地利用」から「機能連携」へ、県内外の人々が交流する場、文化・芸術を創造する場、未来成長へ挑戦する場、歴史と暮らしを紡ぐ場、いのちと健康を支える場という 5 つの将来像を設定
- 令和 12(2030)年度が目標年度

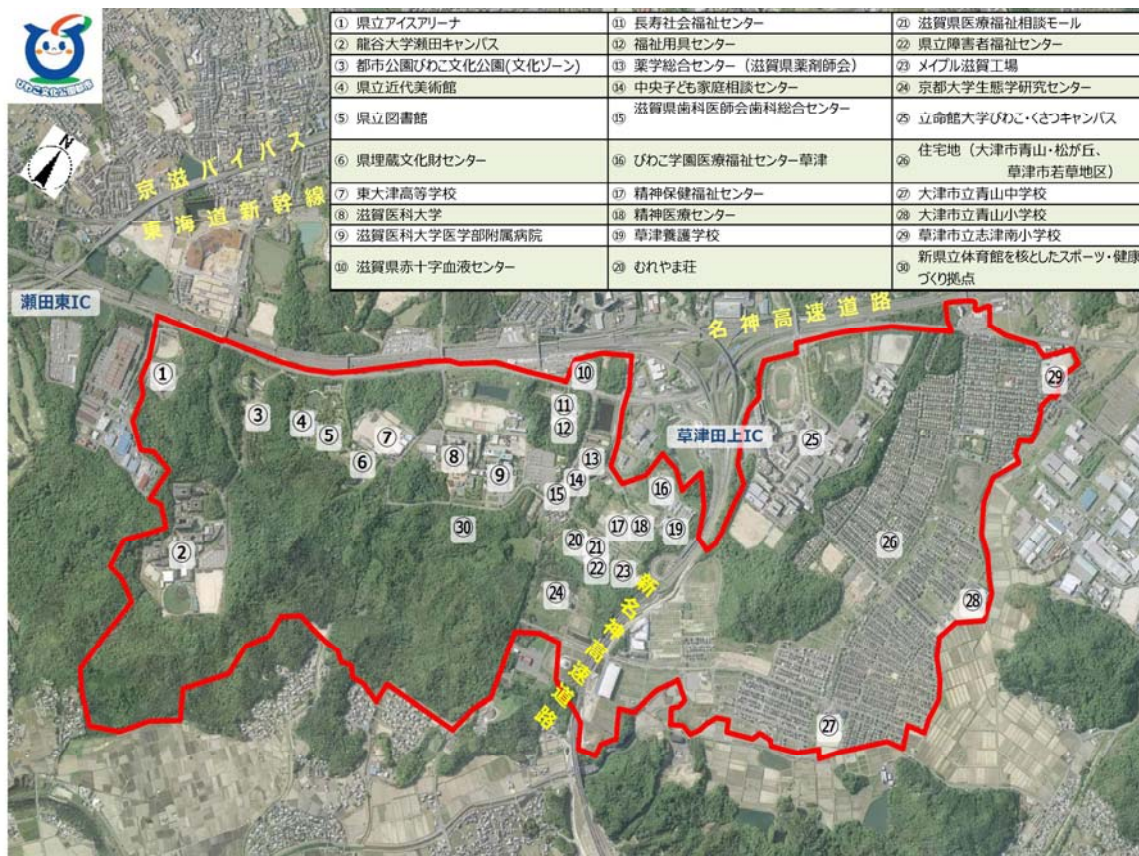


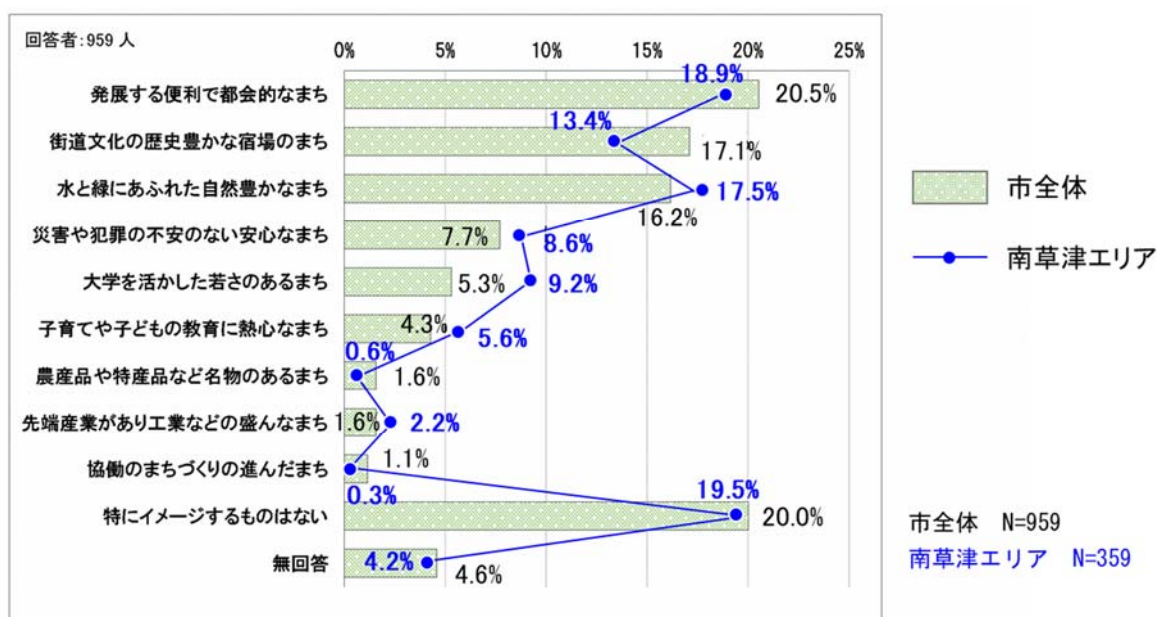
図 参考-17 施設・機関位置図

参考 5 市民等の意向把握

1) 市民意向

① 草津市のまちづくりについての市民意識調査

- 南草津エリアにおける都市のイメージは1位「発展する便利で都会的なまち」(矢倉、老上西学区 1 位)、2 位「水と緑にあふれた自然豊かなまち」(志津南、老上、南笠東学区 1 位)、3 位「街道文化の歴史豊かな宿場のまち」(老上西、玉川学区1位)となっている。
- 4 位の「大学を活かした若さのあるまち」は草津市全体より回答割合が多い。

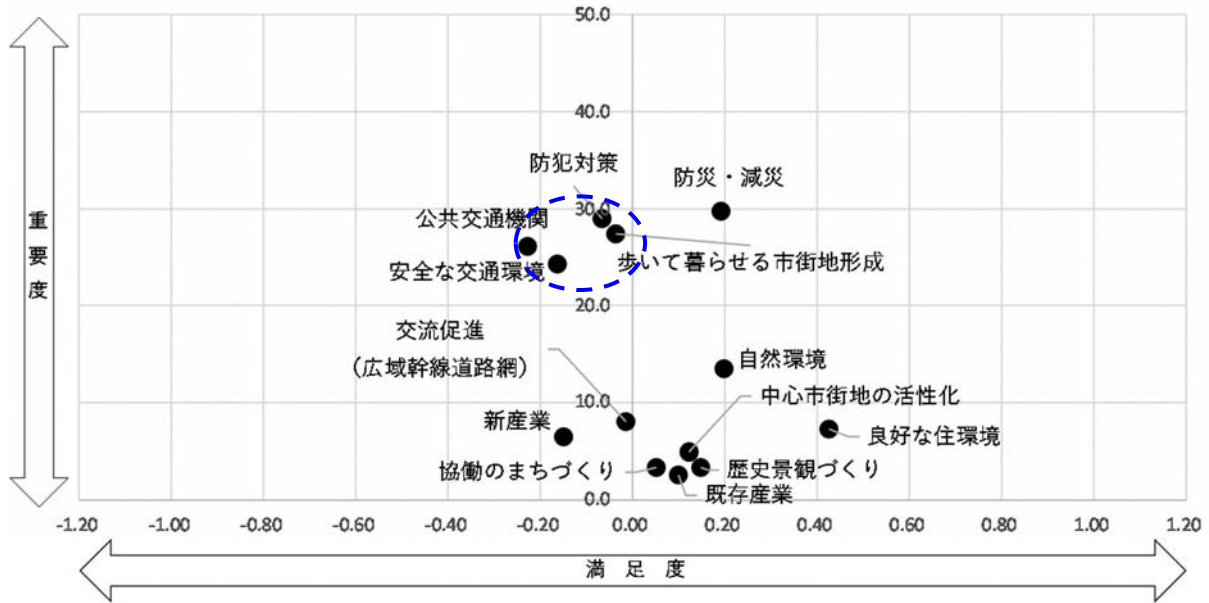


※平成 31(2019)年 2 月実施

図 参考-18 都市のイメージアンケート結果

②草津市都市計画マスタープラン アンケート

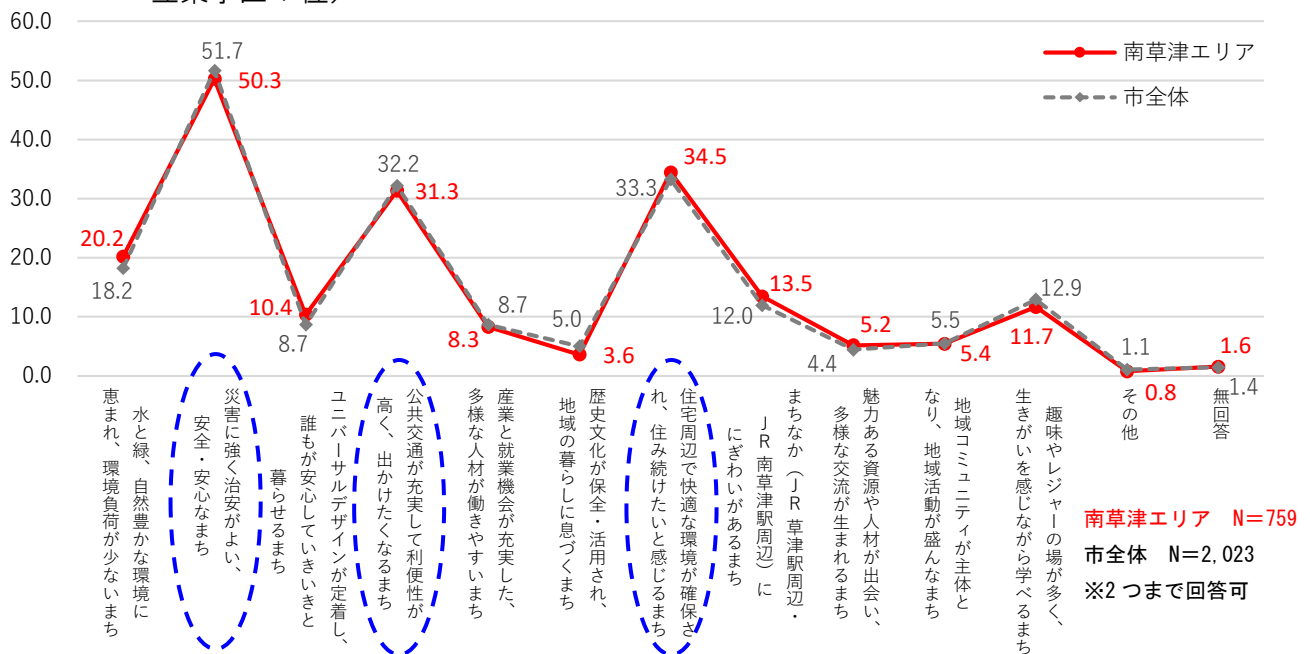
○ 「公共交通機関」「安全な交通環境」「歩いて暮らせる市街地形成」「防犯対策」の満足度が低く、重要度が高い。



※令和元(2019)年11月実施
満足度は「満足」を2点、「やや満足」を1点、「どちらでもない」を0点、「やや不満」を-1点、「不満」を-2点とした加重平均

図 参考-19 まちづくりの重要度・満足度アンケート結果(南草津エリア)

○ めざすべきまちの将来像は、1位「災害に強く治安がよい、安全・安心なまち」(志津南、矢倉、老上、老上西、玉川学区 1位)、2位「住宅周辺で快適な環境が確保され、住み続けたいと感じるまち」、3位「公共交通が充実して利便性が高く、出かけたくなるまち」(南笠東学区 1位)



※令和元(2019)年11月実施

図 参考-20 草津市がめざすべきまちの将来像アンケート結果

③草津市都市計画マスタープラン 地域別市民会議の課題

草津市都市計画マスタープランの策定に際し実施した地域別市民会議において、南草津エリアに属する志津南・矢倉・玉川・南笠東・老上・老上西学区から出された都市計画に関する地域の主なまちづくり課題は以下の通り。

表 参考-5 主なまちづくり課題(南草津エリア)

分野	内容
土地利用	○JR 南草津駅周辺における拠点形成、商業機能集積 ○商業施設や企業、学校の誘致 ○福祉拠点の整備 ○市街化調整区域における拠点形成や幹線道路沿道の土地活用 ○地区計画の検討などによる住宅地の適切な規制
道路・交通	○平野南笠線、大江霊仙寺線などの都市計画道路の整備 ○JR 横断道路、JR 南草津駅へ向かう東西道路の充実 ○浜街道、琵琶湖沿い道路の整備 ○渋滞や危険な交差点の解消 ○通学路や住宅地内の交通安全対策、歩道・自転車道の整備 ○公共交通の充実、新たな公共交通の検討
公園・緑地	○草津川、ロクハ公園の活用促進 ○野路公園等の公園・緑地の整備、維持・管理 ○琵琶湖や河川などの自然環境の保全、維持・管理
安全・安心	○河川改修等の水害対策 ○雨水排水路の維持・管理 ○避難所整備 ○駅周辺の防犯対策 ○防犯灯、防犯カメラの設置 ○バリアフリー化の促進
景観	○東海道、矢橋道等の地域資源を活かしたまちづくり ○琵琶湖を生かしたまちづくり ○歴史的なまちなみ景観形成
住宅・住環境	○空地・空家対策 ○住み続けられる住環境形成 ○緑の多い住宅地づくり ○コミュニティの維持
その他	○ハイウェイオアシスの整備 ○地域まちづくりセンターの更新

※第1回:令和 2(2020)年 1~2 月実施

※第2回:令和 2(2020)年 11~12 月実施

2)懇話会における課題認識

①大学・企業を生かしたまちづくり

- 大学のあるまち(大学の技術研究、新技術)を生かしたまちづくり(まちがキャンパス)
- 工場の進出や住宅開発、大学との連携など民間活力を生かした豊かなまちづくり
- 大学内での交流促進、アクセス性の向上、地域の防災拠点化

②地域と学生の交流促進

- 学生と地域住民との交流機会が少ない
- 高齢化率が高い地域などの地域活動を支えるソフト施策、地域交流の充実(アルバイト、ボランティア等)

③安全に暮らせる住環境

- 若者や高齢者一人でも安心して暮らせるまちづくり
- 地産・地育・地癒(老)・地死をコンセプトとした福祉のまち

④駅周辺の魅力づくり

- 滞留空間の創出(オシャレなカフェ、土産や農産物の販売、コワーキングスペース・シェアオフィス、子育て支援施設等)
- 高齢者等の徒歩圏を踏まえた憩いスペースの設置、地域による緑化・管理
- まちの玄関口としてシンボル化・情報発信
- 子どもから高齢者まで生活・交流できる空間づくり

⑤道路、公共交通の充実

- 駅から大学や病院へ容易に連絡する動線が重要(公共交通の充実や路線の再編、新たな公共交通サービスの検討、渋滞解消)
- 国・県との道路整備の連携が必要
- 歩行者、自転車及安全に通行できるウォークアブルなまちづくり
- 障がいがある人も施設や公共交通を利用できる空間づくり(バリアフリー化)

⑥地域資源を生かしたにぎわいづくり

- 「ピワイチ」の拠点づくり
- 地域まちづくりセンターを中心とした地域拠点性の充実(商業、医療等)

参考 6 大学関係者の意見

令和 2(2020)年 9 月 15 日(火)の「2020 年度 拡大 BKC 地域連携情報共有ミーティング」において、南草津エリアの現状と課題についての意見交換を行った。主な意見は以下の通り。

- 学生が地域の課題解決や活性化に協力する場(まちあるき、モノづくり)を増やすべきである
- 地域の意見を大学が把握し、専門家の紹介や学生の研究テーマとする仕組みづくりが必要
- 南草津エリアでしかできない学生への助成金等の支援の検討が必要
- 大学を地域の人に活用してもらえる仕組みづくりが必要
- 留学生や社会人経験を有する学生が多い強みを生かすとともに、KIFAとの連携が必要
- 外国語表記など外国人が暮らしやすいまちづくりが必要
- 草津市で就職し定住率を高めるべきである
- JR 南草津駅において大学のあるまちとしてインパクトのあるイメージづくり(臙脂色の利用、スポーツ選手のポスター掲示、研究内容の発信など)が必要
- 駅前の公共施設等のコワーキングスペースとして利用のニーズへの対応が必要
- 大学周辺や市内に学生が気軽に利用できるスポーツ施設が不足している
- 3つの大学がある南部エリアに産業クラスターを集積させ、南草津エリアを人が集う玄関口にする
- コロナ禍での新しい社会システムを構築する研究のトライアルの場として南草津エリアでの実証実験を進めてはどうか

参考7 都市と交通ワークショップの成果

「都市と交通ワークショップ」においてグループごとにまとめられた成果は以下の通り。

グループ①

域内のFace to Faceの交流が促進されるまち ～南草津駅を踏まえたみどりの回廊沿いに展開される多様なコミュニティ～

提案の概要

30年後の未来社会では、現状よりさらびびFace to Faceの交流に価値が与えられるようになる。さらに、住民は個人所有の自動車は手放し、シェアリングや公共交通をアクティブモードでの移動の主となる。その結果、南草津駅を軸としたまちの玄関口とし、そこから立命館大学やびわこ文化広場をつなぐ環状の新交通システムが導入され、それに沿って市民の手で「みどりの回廊」が育まれる。回廊に沿って、あるいは回廊に囲まれたエリア内で人の住まいや店舗が建設的に配属され、さまざまな活動が喚起される。回廊内部にはゆるやかな拠点が形成され、拠点はスロー・モビリティによってつながられる。拠点は大学のサテライトとしての機能も持ち、地域住民、学生が学びの場を共有する。

提案のポイント

- 1 駅前ロータリーの広場化
- 2 新交通がつなぐ「みどりの回廊」
- 3 琵琶湖まで続く遊歩道
- 4 拠点を繋ぐスロー・モビリティ
- 5 多様な活動と自由な発信

私たちが考えた南草津の未来のシナリオ

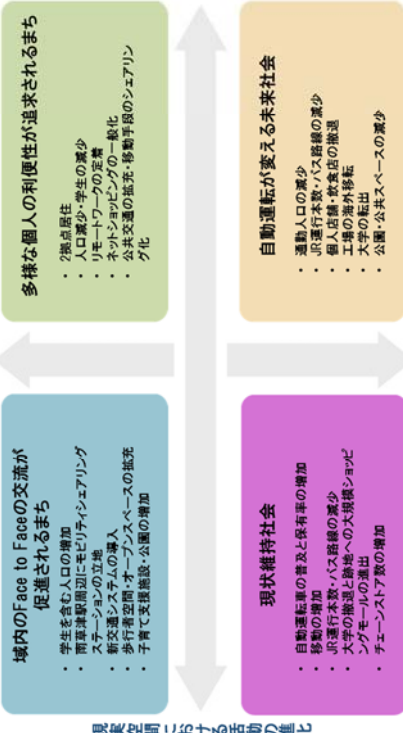
■ パーチャル社会の進展

これまでも普及していた電子マネー決済や、ネットショッピングに加え、コロナ禍で「ネットワーキング」やオンライン飲み会など、オンラインを介した活動領域が大幅に増えた。この傾向がより顕著化していくか、あるいは現実での人と人が空間を共有して行う活動に力点が移るようになるのか、により未来の姿が大きく異なるであろうと考えた。

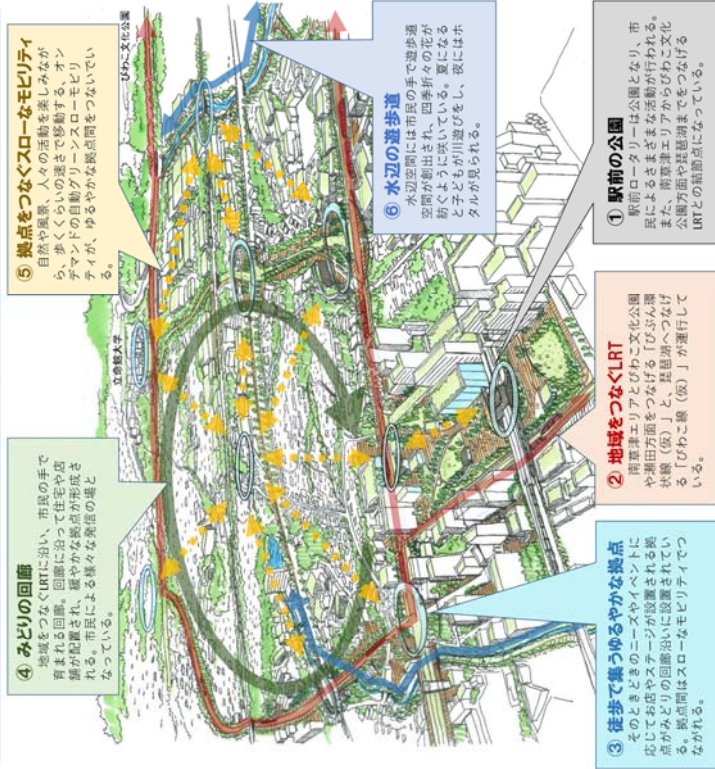
■ 移動手段の変化

自動運転の普及やシェアリングは、大抵「カーシェアリング」や「カーシェアリング」の領域が拡大した場合には、モビリティを個人で所有せず、シェアリングやアクティブモードが拡大していくだろう。一方、カーシェアリングの領域が拡大した場合には、個人所有するモビリティの利便性・快適性が向上するであろう。そこで、移動手段の変化が未来を大きく変えると考えた。

脱クルマ(徒歩・自転車・公共交通・シェアリング)化



2040年の南草津の未来予想図



■ 2040年のAさんの日記

2040年〇月〇日 (△) 晴れ
今日はおはあちゃん地遊びに来てくれる日。新しく開通したLRTで琵琶湖まで遊びに行く。駅の周辺には、パーチャル芸術イベントが開催中。今週はカーブのピッチを昔ながらのペースで歩いた。そうこうしているうちに、手を通りにおはあちゃん地遊び。車道は道の駅、マーケットで夜ご飯の食材を購入し、17時に家に帰る。うにドローン便を手配。

今日はスロー・モビリティで、おはあちゃんは大学生のころにこのあたりに住んでたらしい。懐かしいね〜と書いてながら、学生時代の思い出をいっしょに話してくれた。
夕飯は琵琶湖を空から眺めながら、ホテルが飛び交う幻想的な風景を空から眺めながら、学生さんたちのアートパフォーマンスを見た後、歩いて帰った。明日の予定をスマートフォンで確認し、23時に就寝。
で、デマンドタクシーを予約して23時に就寝。

図 参考-21 ワークショップ成果(グループ①)

グループ②

新旧の多様なコミュニティが融合する共生都市 ～ローカルコミュニティを基礎としたシェア社会に対応したスマートシティ～

提案の概要

急激に人口が増加し、現在も増え続けている南草津。移住者が増えている中で、新旧住民の交流やコミュニティ形成が課題としてあげられる。また、そのライフスタイルも、所有社会を前提とした郊外住宅地帯のまちから、シェア社会の進む都市型の駅前集積型のまちの二分化が進む可能性がある。

グループの議論では、2つのトレンドによって、コミュニティがパラバラになってしまうことを未然に防ぎ、新旧のコミュニティが融合し、多様なライフスタイルを許容できるまちに方向性を出す。

提案のポイント

- ①駅前全体が、シェア市場
- ②ミニスマートシティ構想
- ③ハイパー福祉モデル都市
- ④フェリエのオープン化(大学、企業、市民)
- ⑤駅から伸びるデッキ空間の活用

私たちが考えた南草津の未来のシナリオ

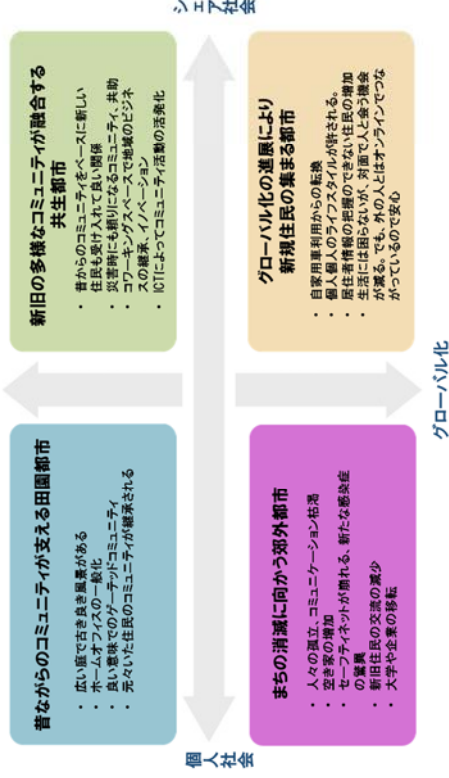
■ シェア社会に向かうのか？

自動車はレンタカー、自転車はシェアサイクル、居住空間はシェアハウス、仕事場はシェアオフィス、娯楽はメルカリなど、様々なものが所有から利用の時代へとシフトしつつある。大学生が多くなる、京都のベントタウンとして働き盛り世代が多く集まる南草津において、このようなトレンドがさらに進み、シェア社会に向かう可能性がある。一方で、コロナの影響で、モノや空間を他人と共有することに抵抗が生まれている傾向もある。

■ 地域のコミュニティは変わってしまうのか？

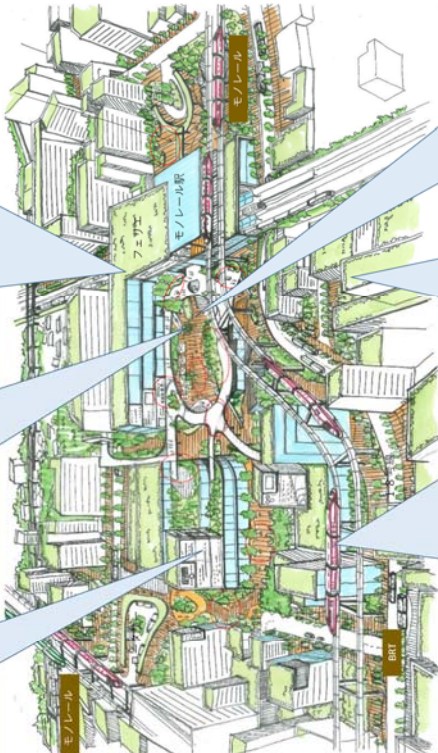
駅や大学がつけられ、急激に都市化が進んだ南草津は、現在もマンションや宅地開発が進められている人口増加中の地区である。新しい住民により若者が増え、賑わいや活気が生まれている。一方で、昔ながらのコミュニティや田舎風さが残っている。将来、人口増加から減少に転じた際に、ローカルコミュニティによって昔ながらの分業型の田舎風さが残されるのか、それとも、グローバル化によるネットワークコミュニティによる集約型の都市へと向かうのか。

ローカル化



2040年の南草津の未来予想図

- ①駅前全体が、シェア市場
ロータリーをいろいろなことに使える広場つきの広場となり、駅周辺のシェアのできる場所となる。
- ②ミニスマートシティ構想
暮らしに役立つ情報が、まちのあちこちのデジタルサイネージで発信されている。
- ③ミニスマートシティ構想
駅を出発し、かがやき通りから大学をまわってパゾニック、また駅に近づく自動運転の循環モノレール、異なる企業の人たちが交流することで、新しい技術が生まれる。人だけでなく、車や技術、知識の拠点としての南草津として生まれ変わる。
- ④フェリエのオープン化(大学、企業、市民)
フェリエのスペースを利用した大学の研究室や企業の会議室など、駅前にも企業や大学キャンパスの機能が配置され、大学や企業と連携した取り組みが強化される。
- ⑤屋上の自由空間化
ビルやマンションの屋上に利用できるシェア空間となる。
- ⑥地域情報の発信
暮らしに役立つ情報が、まちのあちこちのデジタルサイネージで発信されている。



- ③ミニスマートシティ構想
駅を出発し、かがやき通りから大学をまわってパゾニック、また駅に近づく自動運転の循環モノレール、異なる企業の人たちが交流することで、新しい技術が生まれる。人だけでなく、車や技術、知識の拠点としての南草津として生まれ変わる。
- ②東西ロータリーの公園化
車道と西口のロータリーが一体的な公園として整備される。フェリエと駅ビルと面々が互換的につながって、その間にはあちこちにコミュニティのスペースが整備される。

2040年のAさん(共働きの主婦)の日記

2040年〇月〇日 (△) 晴れ

今朝は、西口のロータリーのシェア市場に行き、週末に予定している、足湯のはりでのデイキャンプに必要なアウトドア用品を探す。モノレールやBRTができて、駅が少し便利になっている病院やレストラン、足湯に行けるようになってきた。今日のランチは、どこに行こうかな。

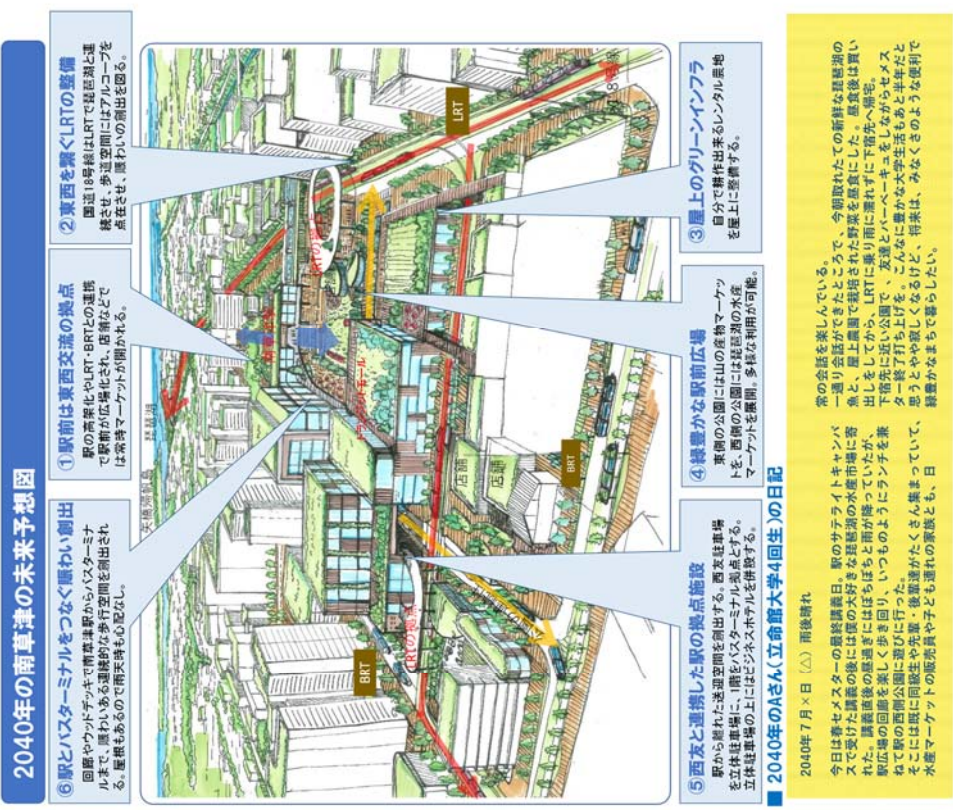
午後には、フェリエに参加。子育ては大変だけれど、自分のための時間もきちんと確保できるのは、便利を南草津ならではのメリット。夕食は、隣のマンションの屋上で、息子の友達の家と花火を見ながら食事をする予定。あつ、今日はサウナ担当だった。屋上菜園でトマトを採りにいかない。

シェア市場で、何が起きた時でもとても安心。

図 参考-21 ワークショップ成果(グループ②)

グループ③

南草津駅を拠点とした山と湖の交流 ～南草津駅を拠点としてファーマーズマーケットが開催されるオーガニックなまち～



2040年の南草津の未来予想図

- ① 駅前は東西交差の地点
駅の高層化やLRT-BRTの連携で駅前の広域化され、店舗などで多層複合施設が立ち上がり、駅前は常時マーケットが開かれる。
- ② 東西を繋ぐLRTの整備
東道18号線はLRTで琵琶湖と連携させ、多層空間にはアルコートを確保し、駅前の開発を図る。
- ③ 屋上のグリーンインフラ
自分で耕作出来るレンタル農地を屋上に整備する。
- ④ 緑豊かな駅前広場
東側の公園には山の植物マーケットを隣接、多様な利用が可能。
- ⑤ 西友と連携した駅の拠点施設
駅から離れた遊歩空間を創出する。西友駐車場を立体駐車場とし、バス・タクシー・自転車などを併設する。
- ⑥ 駅とバスターミナルをつなぐ賑わい創出
回廊やウッドデッキなど歩行者からバス・タクシーまで幅広い交通手段を創出され、重機もあふれる賑わい空間が開かれる。

■ 2040年のAさん(立命館大学4年生)の日記
2040年7月×日 (△) 雨後晴れ
今日は春 semester の最終演習日。駅の前でライトアップで飾られた噴水が、琵琶湖の水産市場に寄った。賑やかな雰囲気にはほほほと胸が膨らんでいる。駅前の回廊を歩くと、いつものようにランチを兼ねて、駅の西側公園に遊びに行きたがる。ここには山と湖の交流が実現している。水産マーケットの賑わいも、山と湖の交流が実現している。

提案のポイント

- ① 駅空間がファーマーズマーケット
- ② 広い駅前空間と屋上の農園化
- ③ 湖と山が駅を中心に有機的に連結
- ④ 郊外の山辺と水辺の空間整備
- ⑤ LRTとBRTの乗り放題で自由移動

提案の概要

自家用車がなくても移動に困らない未来。30年後の南草津はBRTやLRTなどの公共交通機関を自由に乗り降りしながら、南草津の駅を拠点として移動することが可能になる。西の湖側からは水産物が、東の山側からは新鮮な農産物が駅の前から、ファーマーズマーケットに集約される。郊外に広がる住宅やマンションの屋上やオープンスペースは緑地や農地となり、そこで耕作されたオーガニックな作物が駅前で流通し、人々を誘う。また、駅前からバスやタクシーが、徒歩での移動も楽々となる。南草津を離れた山からの山菜も、駅前で新鮮な野菜が、駅前で流通し、人々を誘う。



図 参考-21 ワークショップ成果(グループ③)